探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：東広島市立福富中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
東広島市立福富中学校	３	３５
東広島市立福富小学校	７	９３

（R3.11.1現在で記入）

１　指導上の課題

・教職員に地域についての十分な知識と理解が必要である。
・固定された人間関係のため，多様な意見を出し合って多角的な視点から考えを深めていくことが難しい。
・多くの児童・生徒が，福富町は自然が豊かであり，特産物が多いと考えている。人口の減少が課題だが，課題ではなく，人が少ないことを良いこととして考えている児童・生徒もいる。

２　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

研究テーマ：福富の地域に誇りをもち，自分の生き方を考える
児童・生徒の育成
～異学年や地域との協働的な学びを通して～

自分が生まれ育った郷土は，その後の人生を送るうえで，心のよりどころとなり，生きるうえでの精神的な支えとなるものである。地域での様々な人たちとの出会いや体験は，児童・生徒にとって人生の土台となり，自らの人生を考える時に大きな役割を果たすものである。福富という地域には，起業家や様々な土地からの移住者が多く，魅力的な場所も数多く存在する。この豊かな地域を活用し，様々な人と出会い，職業に触れ，考えを知ることで，児童・生徒が自らの生き方を考える上での学びが深まるのではないかと考えた。自己や郷土について主体的に考え行動できる児童・生徒を育成するため，地域の人々の生き方や地域の自然を知り，様々な生き方や価値観，仕事を見つめることで，自分自身のことや自己の生き方について考えさせたい。また，地域の人だけでなく，異学年で学習を進めることで，より学びが深まるのではないかと考えた。人間関係が固定化された同学年だけで学習を行うのではなく，異学年と協働で行うことは，児童・生徒にとって新たな考えと出会うきっかけになり，下級生は上級生の姿を通して学んだり上級生はリーダー性を育んだりする機会にもなると考える。

（２）資質・能力の設定について

本校はドリームプロジェクトを通して，「自己の生き方を考える力」を育成したいと考えている。その力を構成する「協働性・主体性」について，次のようなルーブリックを作成した。

	協働性	グループ	主体性	
領域力	他者の意見を，相手の目を見て，最後まで聞くことができる。	小１・２年生	みんなで考えた課題について，前向きに取り組み，自分の意見をまとめることができる。	自分の思考力
共感力	他者の意見を聞き，自分の意見と違った場合でも，その良さを認め，共感することができる。	小３・４年生	課題解決に必要な情報を，自分の意思で集め，まとめることができる。	自主的な力
メタ認知力	他者の意見と自分の意見を比較し，自分の意見を客観的に捉えながら話し合うことができる。	小５・６年生	課題解決に向けて，見通しをもって情報を集め，まとめることができる。	見通す力
活用力	自他のよさを生かしながら，協力して課題解決に取り組むことができる。	中１・２年生	解答のない複雑な地域の課題について，粘り強く取り組むことができる。	粘り強く取り組む力
発信力	自分たちで協力してまとめた意見を，相手の興味関心を引き出すよう工夫し，発信することができる。	中３年生	課題解決に向けて，必要な情報を収集・精選し，自分なりの解決策を創造することができる。	主体的な力

「協働性・主体性」ともに成長過程に応じた段階的な評価となるように留意した。まず，前の発達段階から何がプラスされたのか分かりやすくなるよう「＋〇〇力」という記述をした。これにより，どのような資質・能力を育成したいのか，イメージしやすくなった。次に，各グループの担当教諭で検討し，修正した。

また，学習指導案の作成にあたって，下記のような３観点１１項目の評価規準一覧表を作成した。

評価の観点		評価規準 A	評価規準 B
知識・技能	① 知識	○福富町で活躍している方々の夢を実現させるための努力や地域に対する思いと福富町の魅力とのつながりに気付いている。	○福富町で活躍している方々の夢を実現させるための努力や地域に対する思いに気付いている。
	② 技能	○地域の方々の夢や地域に対する様々な思いや願いを知るために，インタビューによる調査を相手に応じた方法で実施したり，ウェブサイトや本から情報を結び付けながら効率よく収集したり整理したりしている。	○地域の方々の夢や地域に対する様々な思いや願いを知るために，インタビューによる調査を相手に応じた方法で実施したり，ウェブサイトや本から情報を収集したり整理したりしている。
	③ 探究的な学習の良さの理解	○福富町の魅力に対する認識の高まりは，福富町で活躍している人々の夢と地域に対する思いを探究的に学習してきたことの成果であると気付いている。	○福富町の魅力に対する認識の高まりは，福富町で活躍している人々を学習してきたことの成果であると気付いている。
思考・判断・表現	① 課題の設定	○昔と現在の人口の比較から，福富町の未来について課題を設定するとともに，解決に必要な調査方法や内容を明確にしながら，インタビューや表現方法の計画を立てている。	○昔と現在の人口の比較から，福富町の未来について課題を設定するとともに，自分なりにインタビューや表現方法の計画を立てている。
	② 情報の収集	○課題を解決するために必要な情報を，目的に応じて効率よく収集することができる。	○課題を解決するために，必要とする情報を収集することができる。
	③ 整理・分析	○地域の方々の思いや願いを比較しながら共通点や相違点を見付け，福富町の魅力について多面的・多角的に捉えることができる。	○地域の方々の思いや願いから共通点や相違点を見付け，新たな魅力に気付くことができる。
	④ まとめ・表現	○町の魅力発信に向け，表現方法の特徴や目的に合わせて，より魅力が伝わるよう表現方法の特徴に合わせて分かりやすくまとめている。	○町の魅力発信に向け，表現方法の特徴や目的に合わせて分かりやすくまとめている。
主体的に学習に取り組む態度	① 自己理解・他者理解	○他者の意見を尊重し，良さを生かすことができる。	○他者の意見を受け入れることができる。
	② 主体性	○課題の解決に向けて，よりよい解決方法を考えながら見通しをもって活動に取り組み，まとめることができる。	○課題の解決に向けて，見通しをもって活動に取り組み，まとめることができる。
	③ 協働性	○他者の意見と自分の意見を比較し，自分の意見を客観的に捉えながら話し合うことができる。	○他者の意見と自分の意見を比較しながら話し合うことができる。
	④ 将来展望・社会参画	○地域の課題の解決のためにできることを考えながら自分事として取り組み，地域や自分の未来につなげることができる。	○地域の課題の解決に取り組み，地域や自分の未来を考えることができる。

単元の評価観点・評価規準

（３）取組について

①プロジェクトメンバーの構成

今年度の研究を進めるにあたり，「FIT」というプロジェクトチームを立ち上げた。この「FIT」という名前は，「Fukutomi Inquiry learning Team」の略であり，管理職，研究推進リーダー，小中の研究担当教員，生活科担当教員で構成されている。

②資質・能力の設定（前述）

③単元ストーリーの作成

本校の単元ストーリーは，鈴木・宮里（2012）の提案した道徳学習プログラムを基にして作成した。この単元ストーリーでは，一番下にめざす児童・生徒の姿を設定し，単元全体を通してめざす姿に到達するようにしている。また，児童・生徒の思考の流れ，地域との関わりも明示した。本校の活動は異学年で行うため，教職員間の連携も不可欠である。学習活動の流れをまとめた本ストーリーを提示することは，共通認識をもち，同じ視点で児童・生徒の資質・能力の育成に寄与していくことにつながる。

④福富型協働的な学び

探究的な学習における取組の特徴として，福富型の協働的な学びが挙げられる。小中一貫教育を生かした異学年集団や地域の人々との協働を通し，探究的な学習に取り組んだ。

ア　異学年での協働的な学び

小学校１・２年生，３・４年生，５・６年生，中学校１・２年生で異学年集団を作り，協働的な学習を行った。効果の高い異学年交流を意識して活動を行えば，異学年での協働的な学びは，児童の協働性のみならず，主体性の育成にもつながる。ただ異学年集団にするのではなく，効果の高い異学年交流にするために，教師側から「与えられた」ものではなく，児童・生徒自らが課題と

感じ，解決しようと試行錯誤できる学習テーマが必要であった。そこで，児童・生徒にとって最も身近である「地域」に目を向けて学習課題を設定することとした。

イ　地域との協働的な学び＜イメージマップの活用＞

地域を題材とした学習課題を設定する際，イメージマップを活用して実態把握をした。それぞれが地域のよさと感じていること，地域に対して思っていることを把握することで，異学年集団の実態に合ったテーマを設定することができた。設定したテーマは次の通りである。

小学校１・２年生…学校・道の駅　３・４年生…地域の自然
５・６年生…地域の人々

中学校１・２年生…福富の魅力 再発見　３年生…福富提言

福富町は東広島市内で最も人口が少ないが，地域人材，魅力的な場所や取組が非常に豊富な町である。こうした福富町の特徴も踏まえ，地域との協働的な学びを進めた。

⑤導入時指導案の作成

効果的な「探究的な学習」を行うためには，教師側から「与えられた」ものではなく，児童・生徒自らが課題と感じ，解決しようと試行錯誤できる学習テーマが必要である。そこで最も重要になるのは，教材（課題）との出会わせ方なのではないかと考え，FITと担当学年とで何度も協議を重ね，導入時の指導案を作り上げた。「なぜだろう？」という疑問や「解決したい！」という意欲を引き出す仕掛けを考えておくことで，児童・生徒は課題に対して真剣に向き合い，解決しようと進み始める。児童・生徒の立場となって出会わせ方を考えることは，探究的な学習には非常に有効であることが分かった。

⑥校内研修の充実

小学校と中学校合同で行う校内研修の時間を設定した。小学校と中学校の教職員が，９年間の発達段階の理解を深めること，そして発達段階を理解したうえで９年間を見通した学習課題を設定することが必要だと考えた。そのため，次のような工夫を行った。

・通信の発行

探究的な学習の研究推進通信を発行し，紙面による研修情報の共有，進捗状況の交流などを行うことで，小・中学校の教職員が同じベクトルで研究を推進できるよう工夫を行った。

・進捗状況の交流

交流を定期的に行い，他学年が感じている学習を進める上でのよさや課題，地域の誰と交流し，学びを進めているのかを知ることで，担当学年の取組に生かすことができた。

・小中合同研究授業の実施

今年度は，小学校５・６年生の授業を示範授業として，小中合同授業研究を行った。

３　実践事例

○小学校１・２年生「ふくとみ　いいね！　おしえたい！」
　年長さんに福富小・中学校と道の駅のことを伝える。

○小学校３・４年生「福富の自然守り隊」
　学級園の作物の鳥獣被害から，自然の豊かさについて考える。

○小学校５・６年生「夢の実現プロジェクトｆ（フォルテ）
　～魅力伝える「福」作戦！～」
　福富で活躍する人に焦点を当て，福富の魅力について考え，外部に発信する。

○中学校１・２年生「福富再発見！～福富の魅力を発信しよう～」
　福富の魅力を焦点化し，その魅力を伝える。

○中学校３年生「福富提言」
　福富のよりよい未来のため，仮説を立て検証する。

※主体性と協働性についての児童・生徒の変容に関する資料については，「【東広島市】福富中学校変容資料」として提出。

４　研究の成果と課題等

（１）成果

今年度の成果として，次の３点が挙げられる。

１点目は，導入の工夫による課題意識のもたせ方である。今年度，単元を開発するにあたり，最も重視したのが導入部分である。児童・生徒が「やらされている」という感覚ではなく，「自ら課題をもって探究に取り組む」ためにはどうしたらよいかを考えるにあたり，第１時は非常に重要な時間であった。この時点で「やらされている」という感覚をもつと，その後，児童・生徒は「自ら解決したい」という意欲をなかなかもつことはできないであろう。児童・生徒が描いた地域のイメージマップを基にし，児童・生徒の実態に合った身近な課題から入ったことにより，疑問や調べたいという意欲をもたせることができた。

２点目は，地域への思いが高まったことである。地域を題材とした探究課題を設定したことで，地域への興味や関心が増した児童・生徒が増えた。ただ調べるだけでなく，実際に現地に行って体験したり，地域の方々に直接インタビューをしたりしたことで，より自分事として学ぶことができたのではないかと思う。地域の方々と協働することで，地域のことをもっと知りたい，課題を解決したいという思いの高まりへとつながった。

３点目は，異学年交流によるよさである。異学年と合同で学習を進めたことで，児童・生徒にとって協働性を培う良い学びの場になった。下級生は上級生から直接教わったり，上級生の姿を見て学習したりすることができた。また，上級生は，知識や経験を基に下級生に教えたり，手本になろうとしたりすることで，リーダー性を養うことができた。異学年で互いに学び合うことができる場を意図的に設定したことで，協働性の向上へとつなげることができた。

（２）課題

課題としては，２点挙げられる。

１点目は，評価の難しさである。今年度，ルーブリックを作成し，評価へと生かすようにした。しかし，評価項目によっては，評価のタイミングが難しい部分があったり，妥当性にも疑問が残ったりしている。また，具体的にどのように見取るかという部分にも課題があった。さらに，児童・生徒にルーブリックの評価項目を明示していないため，指導者の見取りたい部分とずれが生じていると感じた。

２点目は，学習期間が長いことである。本校が計画した探究的な学習は，長期に渡って継続するものであるため，切れ目がなく，何を目指しているのか曖昧になる期間があった。１次，２次というように，短い期間を連続する意識を教師側がもち，学習の途中で，再度疑問や刺激を与えるような仕掛けが必要である。

（３）今後の改善方策等

①ルーブリックの作成，改善

本年度の研究結果を踏まえて，ルーブリックの見直し，改善を行う。より妥当性の高いものになるよう協議を重ねるが，活動自体が演繹的なものにならないように留意する。常に変化し，改善を重ねていくものだと共通認識をもっておく。

②資質・能力の見取り

ルーブリックを児童・生徒に明示する。そして，どのタイミングで資質能力を見取るのか，見取る回数なども統一する。また，見取る方法（アンケート，日々の振り返り，写真や動画など，学習成果物等）についても協議し，より多くの資料から資質・能力を見取ることができるよう，工夫・改善していく。